

# 光明寺だより

## 第94号

浄土真宗本願寺派

### 光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583

## —第25代専如門主伝灯奉告法要— 本山参拝と京都観光

★とき 4月27日(木)～28日(金)

★参加費 36500円

★申込み〆切 3月末

★お申込み 光明寺 0897-53-4583



「伝灯奉告法要」はご門主が継職される時だけ勤められる大切な法要です。  
この機会にぜひご参拝下さい。

ラクダの背中  
大きなコブは  
生き延びるための  
エネルギー  
カタツムリの背中  
大きなカラは  
身を守るための  
マイホーム  
仕事とか 家庭とか  
ヒトも重い荷物を  
背負っているが  
実は その重い  
荷物によって  
生かされている

重荷 東京都 笹川 勇 45

心に残る詩



産経新聞「朝の詩」より

## 「いのち」の願い



藤田徹文先生の著書『いのちの願い』の中で、「阿弥陀仏の本願」について次のようなことが書かれていました。

・・・「あなたの「いのち」が本当に願っていることを実現してあげたい」というのが阿弥陀さまの願いです。私たちの「いのち」が本当に願っていることは何かと言えば、「自在」ということです。

「自在」は「自由」とは違います。

「自由」とは縛られていない状況から抜け出すことによつて獲得するものです。例えば、家で奥さんになら縛られている人は、家から出て、よそに飲みにも行ったら自由。また会社に縛られているサラリーマンは仕事が終われば自由。つまり「自由」は現状から抜け出すことによつて実現するものです。

しかし「自在」というのは縛られているものから抜け出すというのではなく、どの場にあつても私は私として、何物にも束縛されずに存在するということです。家にいる間は自由でないとか、会社にいる間は自由がないということではなく、どこにいようと、自分の「いのち」のありつたけを生きると

というのが「自在」です。

それが仏教で言う本当の「楽」です。その楽が極まった世界が「極楽」です。ですから「極楽」というのは何物にも縛られないで生きられるところなのです。それぞれの「いのち」が力一杯生きてそれぞれ「いのち」が照らしあい支え合う、そんな世界が極楽なのです。そのことを象徴的に表しているのが「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という阿弥陀経の言葉です。青色の花は青い光を出し、黄色は黄色、赤は赤、白は白というのが「自在」なのです。だから人と比べてどうこうということではないのです。他と比べて「勝った、負けた、上だ、下だということではない。その人でしかない「いのち」を生きていくというのが「自在」です。・・・・・

(要旨抜粋)

私たちの「いのち」が本当に願っていること・・・それは「自在」だと仰っています。

「自在」とはどのような立場にあつても何物にも束縛されずに、それぞれがそれぞれの持ち味を生かし(青色青光、黄色黄光)、いただいた「いのち」のありつたけを生きる、ということになります。

本紙23号で次のような詩を紹介したことがあります。

みんなすこい

カイズカイブキもモッコクも

ツツジもシャクナゲもアジサイも

すこい

スズメもカラスものらネコも

ムカデもアリノコもダンゴムシも

みんなすこい

みんな「自分」を生きている

この詩にあるように、あらゆる「いのち」はどのような立場・境遇にあらうとも、愚痴をこぼさず、自分の「いのち」を精一杯生きています。のら猫が「飼い猫になりたい」とか、松が「桜になりたい」と羨ましがったりはしません。そこには、何物にも束縛されることない「自分」でしかない「いのち」を生きているのです。

ところが、私たち人間はどうでしょうか。

「何でこんな苦労をせないかんのや」

「何でこんな病氣になつたんや」

「何でこんな家に生まれたんや」等々・・・周りと比べて自らの不遇を嘆き、不平不満の愚痴をこぼしては自らを縛り、身動きできないような、そんな日暮しを送っているのではないのでしょうか。これではとてもいただいた「いのち」のありつたけを生きているとは言えません。

だから教えを聞かないとダメなのです。教えを聞けば、我が身の姿が明らかにされます。それを親鸞聖人は次のように仰っています。

『凡夫』といふは、無明煩惱むみやうぼんのうわれらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず（一念多念意）

つまり、私たち凡夫は迷いの根源である煩惱がこの身体一杯に満ちあふれ、欲を貪り、腹を立て愚痴をこぼし、ねたみやひがみ心が強く、死ぬまでその煩惱は無くならないというのです。しかも私たちは、「自是非たひ」の心（自分は善くて他人は悪いという心）を持って、ことにさえ気が付かず、日々を過ごしているのです。まことに、救われ難い、お粗末で愚かな煩惱具足の凡夫なのです。

そんな私の「いのち」が、無量壽・無量光むりやうじゆと呼ばれる、文字通り光と寿命のきわまない「いのち」の世界で、生かされて生きているということが、教えを通して知らされるのです。

その「光と寿命のきわみない「いのち」」を阿弥陀如来と申し上げるのです。

正信偈の冒頭の意訳に「光といのちきわもなき阿弥陀ほとけを仰がなん」とありますように、我がいのちを包み生かして下さい

ている大いなるいのちのハタラクキを浄土真宗のみ教えに生きた先人たちは、阿弥陀さまといただいてきたのです。

もとより阿弥陀さまの本体は色も形もありません、そこにはあらゆるいのちを包み生かす「ハタラクキ」だけがあるのです。そのハタラクキを法性法身ほつしやうほんじん（法身仏）と申します。その法性法身（法身仏）が、そのハタラクキ（あらゆるいのちを包み生かしているというハタラクキ）を凡夫の私たちに知らせんがために、姿、形を表し（これを方便法身ほうべんほつしんと申します）、「南無阿弥陀仏」という呼び声となつて、私の目覚めを促し続けているのです。

凡夫の私にとって色もない形もない法性法身は感得出来ません。それが姿、形を表し、南無阿弥陀仏という呼び声となつて私に働きかけて下さることによって、法性法身のハタラクキを知ることが出来るのです。

その呼び声（南無阿弥陀仏）は、小さな「自我」の計らいに縛られて生きている私に向かつて、「そんな狭い世界から一刻も早く出てきなさい、アミダという光といのちのきわみないひろい「いのち」の世界に帰ってきなさい」と呼びかけているのです。

思えば、私たちは自分の周りに溝を掘り壁を築いて、自分にとって都合の良いものや味方と考えるものの中に入れるが、そうでないものは排除していくという、大変狭

い世界の中に身を置いています。

そんな私たちに向かつて「あなたの「いのち」はそんな狭い世界に生きている「いのち」ではありません。大きな大きないのちのハタラクキに包まれ生かされている「いのち」です。早くそのことに目覚めて下さい」というのが南無阿弥陀仏の呼び声です。

その阿弥陀さまの呼び声が聞こえた時、私たちの「いのち」はあらゆる束縛を脱して、自在に生きる人生が実現するのです。

「いのち」自在たれ、それが南無阿弥陀仏の呼び声なのです。



## 「伝灯奉告法要」親教一

昨年十月一日より本山において始まりました「伝灯奉告法要」の初日に、第25代専如門主が「念仏者の生き方」と題したご親教を述べられました。全文掲載いたします。是非、熟読ください。

### 念仏者の生き方

仏教は今から約2500年前、釈尊がさとりを開いて仏陀ぶつだとなられたことに始まります。わが国では、仏教はもともと仏法ぶつぽうと呼ばれていました。ここでいう法とは、この世界と私たち人間のありのままの真実ということであり、これは時間と場所を超えた普遍的な真実です。そして、この真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩を超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常しよぎんむじょう」と「縁起えんぎ」という言葉で表します。「諸行無常」とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまる

ことなく移り変わっているということであり、「縁起」とは、その一瞬ごとにすべての物事は、原因や条件が互いに関わりあって存在しているという真実です。したがって、そのような世界のあり方の中には、固定した変化しない私というものは存在しません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自分というものを固定した実体と考え、欲望の赴おもむくままに自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心の心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りにならないことで悩み苦しんだり、争いを起こしたりして、苦悩の人生から一歩たりとも自由になれないのです。このように真実に背いた自己中心性を仏教では無明煩惱むみょうぼんのうといい、この煩惱が私たちを迷いの世界に繋ぎ止める原因となるのです。なかでも代表的な煩惱は、むさぼり・いかり・おろかさの三つで、これを三毒の煩惱といえます。

親鸞聖人も煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山ひえいざんで20年にわたりご修行

に励まれました。しかし、どれほど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の深さを自覚され、ついに比叡山を下り、法然聖人のお導きによって阿弥陀如来の救いのはたらきに出遇われました。阿弥陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま救い、さとりの世界へ導こうと願われ、その願い通りにはたき続けてくださっている仏さまです。この願いを、本願ほんがんといえます。我執がしゅう、我欲がよくの世界に迷い込み、そこから抜け出せない私を、そのままの姿で救うとはたらき続けていくのださる阿弥陀如来のご本願ほど、有り難いお慈悲じひはありません。しかし、今ここでの救いの中にありながらも、そのお慈悲ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かさ、煩惱の深さに悲嘆ひたんせざるをえません。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎み、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それ

は例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語」という生き方です。たとえ、それらが仏さまの真似事といわれようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙で、「(あなた方は)今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願の心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」とお示しになられています。たいへん重いご教示です。

今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちは

この命を終える瞬間まで、我欲に執われたい煩惱具足の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはいけません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心になうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう。

2016 (平成28)年10月1日

浄土真宗本願寺派門主

大谷 光淳

★ご親教―ご門主が門信徒に対して

直接教化されることです

### ―伝灯奉告法要協賛事業―

「今あなたに伝えたい言葉」

#### 《最優秀賞》

★あなたよりあなたを思う方がいる

あなたがあなた自身を見限りそうになった時に私は何もしてあげられないかもしれない。それでもあなたを見捨てないアミダさまがいらっしゃるといふ事はどうか忘れないでほしい。山崎魁之(熊本県)

#### 《優秀賞》

★あなたと出会えた事が私の最高のご縁です

★また会おうね。キミとつながったこのご縁

#### 《入賞》

★幸せは、なるものじゃなくて、気づくもの

★あなたがうれしいと、私もうれしいよ

★背筋を伸ばせ しんどかったら曲げてもいいよ

★目に見えないものを大切に

★弱さを知ること強くなれる



趣味の広場



俳句を楽しむ(七十三)

森本隆を

年が明けてめでたいめでたいと言っているうちに松も明け、世の中もすっかり正気に戻りました。一月十二日に光明寺では藤田徹文先生をお迎えして「新春特別法座」が開催されましたが、その頃から約一週間日本列島が大寒波におそれ、この辺でも珍しく雪がちらつく有様でした。思えば一年中で最も寒い時期で、暦でも「寒」(小寒から立春までの三十日)と呼ばれる時期です。まだまだしばらく雪の降る日もあるうかというところで、今回は「雪」をテーマにいろいろ句を拾ってみたいと思います。まず、空一面に重く雲がたれ込めて暗く、今にも雪が降ってきそうな空模様を言う季語に「雪催」があります。

手の中に小さき手のある雪催 辻 美奈子  
忘れ物せし子追ひゆく雪催 徳丸 峻二  
発ちし子の衣たたみ雪催 面地 豊子  
春や夏の開放的で明るい季節と違って、雪でも降りそうで暗い、ま冬の季節感とともに人間のこまやかな情の動きを詠んだ句です。そして、空からその年の初めての雪がちらちらと降ってくると、「初雪」ですね。土地によつ

てその時期は違いますが、

初雪の忍ち松に積りけり 日野 草城

はじめての雪間に降り闇にやむ 野澤節子

初雪が大雪となるよき年か 伊藤 政美

の三句を見ても、初めての雪をどう受け止めるか、どう俳句に詠むか、人によっていろいろであることがわかります。そして、雪雲が日本列島を縦断する山岳地帯にせきとめられて日本海側に雪が降る時、私たちの住む瀬戸内や太平洋側では冬晴れで、その青空に雪が舞う日があります。そんな雪を俳句の季語としては「風花」といいます。

風花のかかりてあをき目刺買ふ 石原舟月  
みづうみの底見えてみて風花す 西山 睦  
風花と舞ふてはなやぐ鷹一羽 中澤文次郎  
風花や一歩いずれば旅ごころ 山口いさを  
厳寒期の空に舞う雪を見てもそれを否定的に受け止めず、その気分や情緒を、見た別の物に託して詩歌や句に詠むところは、四季とともに生きてきた日本人のこころですね。また、雪が晴れたら晴れたで「雪晴」という季語で次のような句があります。

雪晴や山押し分けて川流る 相馬 遷子  
雪後の天いきいきと掌の紅林檎 角川源義  
雪晴に足袋干すひと静かなる 沢木欣一  
雪の降り止んだ翌朝は快晴無風の日に恵まれること多いのですが、それを「雪晴」、「雪後の天」といい、誰もが良い気分になるのですが、物の色や風景に託して気持ちに句に詠んでいます。

さて、「雪」といえば、日本の俳句界では

まずこの五句に尽きるかと思えます。

酒飲めばいと寝られぬ夜の雪 芭蕉

応々といへど敲くや雪の門 芭蕉

是がまあつひの栖か雪五尺 一茶

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男

この五句は江戸期から近代、現代を通してまだ越えられていない名句です。旅の心から、落ちぶれて故郷へ帰った時の心情や、重い病気に臥せて外の世界も見られない気持ち、一語の一語をもつて詠み、しかも悲痛さなどちつとも感じさせない、美しい世界として俳句に詠み込んでいます。さて、これからもまだ寒い日は続きますが、すぐそこまで来ている春に期待し、その兆しを自然の中に探して、一日一日を明るく暮らしましょう。今年もよろしくお願ひします。



# 位職書作品



【字句】 青色青光  
【意味】 青い色には青い光

自分の色（持ち味）を精一杯輝かせること

（色紙）

## BOOK 本

### 『いのちの願い』 歎異抄講話



発行所 法蔵館  
著者 藤田徹文  
定価 1600円（税別）

本書は、さいたま市で毎月開かれている「心の糧セミナー・歎異抄に学ぶ」において著者が1年間にわたって話された講話に加筆されたものです。

歎異抄は親鸞聖人の思想、信仰を伝えるもので、「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや」などの言葉に代表されるように、逆説的な思想展開や、緊迫した師弟との問答を通して、読む人の心を揺さぶるものがあります。

本書は第1講・阿弥陀 第2講・本願に分けて、歎異抄を味わっていく上で大切なポイントとなる言葉を分かり易く解説されています。講話のテープを起して編集されていますので、その時の会場の雰囲気伝わってくるような臨場感あふれる書になっています。今回の一口法話「いのちの願い」は本書を参考にいたしました。

# おねはん 涅槃会

とき 3月15日(水)

- 1回目 9時～10時
- 2回目 11時～12時
- 3回目 13時～14時

★該当者にはご案内を同封しています

# 彼岸会法座

とき 3月22日(水)  
午後2時

【講師】 大阪教区・法栄寺  
小林顯英先生



## 言葉のプレゼント

あなたは今日  
微笑みましたか？  
喜びを感じましたか？  
優しい心になれましたか？  
そして  
美しいものに心を向けましたか？



新春法座（1月12日開催）の様子

## 光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



★1月12日(木)藤田徹文先生(三原市・光徳寺)をお招きして恒例の新春法座が開かれました。20名の参拝者がありました

(\*上記写真参照)

★本山団体参拝(4月27日実施)の申込み締切日を3月末日まで延長しました。ぜひご参拝下さい。

(\*関連記事1ページ)

